



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

受難の主日(枝の主日) B年(2021年3月28日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

今日から<sup>せいしゅうかん はじ</sup>聖週間が始まります。

キリスト教会にとって、とても大切な<sup>たいせつ</sup>一週間となります。

昔話を一つ。1968年頃だったと思いますが、日本のカトリック教会でも第二バチカン<sup>こうかいぎ</sup>公会議(1962-65)に基づく<sup>もと てんれいかいかく じょじょ</sup>典礼改革が徐々に行われていきました。その頃は、公会議前のラテン語による<sup>さっしん</sup>典礼と公会議で刷新された新しい<sup>さいしん</sup>典礼のちょうど変わり目にありました。わたしは小学校一年生でした。ですから、一年生の時のミサはラテン語でした。しかし、二年生にあがる頃から、<sup>しだい</sup>次第に日本語のミサに変わりつつありました。

そんな変化の時期、ある日曜日のお説教で神父さんが話してくれたのを今でも<sup>おぼ</sup>覚えています。

「信仰の中心<sup>しゆ ふっかつ</sup>は主の復活です。ミサの中心にイエスさまの<sup>じゆなん</sup>受難と死、そして復活があります。そこから、<sup>どうしんえん さまさま</sup>同心円状に様々なミサが広がっていくのです。それはまるで、池の真ん中に石を<sup>な</sup>投げて、<sup>ほん</sup>波紋が広がっていくのと同じです。投げた石はイエスさまの<sup>じゆにく</sup>受肉です。投げた石のおかげで池の真ん中にイエスさまの復活が生まれます。そこから広がっていく波紋は、中心に近いところにイエスさまのご<sup>こうたん こうげん</sup>降誕やご公現があります。二番目の波紋にマリアさまのお祝い日があります。そして三番目の波紋は聖人たちのお祝いです」

典礼の中心に主イエス・キリストの<sup>つた</sup>受難、死、復活があることを伝えようとしたたとえ話でした。子ども心に、わたしは、こころの中に<sup>しず</sup>静かな池に投げ込まれた石のイメージと、静かに静かに広がっていく波紋のイメージを作り上げることができました。とても<sup>いんしょうてき</sup>印象的に、この話を覚えています。

ちょっと、<sup>むずか</sup>難しい話になりますが、<sup>すぎこし ひ ぎ</sup>「過越の秘義」を祝うのが教会です。「過越の秘義」とは主イエス・キリストの<sup>じゆなん</sup>受難、死、復活の出来事です。これは秘義、つまり神秘・ミステリーです。しかも、二千年前に<sup>しょう</sup>生じたイエスさまによる過越の出来事を、教会は今も、これからも祝い続けます。ミサというものは、形式的には最後の<sup>さいご ばんさん</sup>晩餐の姿をとっていますが、内容としては「過越の秘義」を祝うことです。そして、教会のすべての<sup>いの しんじん</sup>典礼、祈り、信心は、この「過越の秘義」へと<sup>つら</sup>連なっています。

くものです。ですから、聖週間は特にイエスさまの過越の出来事を、聖書を基にしながら、典礼として記念し、祝う時なのです。

死からいのちへ、闇から光へ、罪からゆるしへ、哀しみから喜びへといのちは移ろっていきます。聖書の表現を使えば、このいのちの移ろいこそが、過越です。過越は人間の努力でなされるものではありません。父である神さまの無償の恵みの中でなされるのです。人間は自分の力では、いのちへ、光へ、ゆるしへ、喜びへと移ろうことができないのです。イエスさまが十字架でいのちを明け渡して、はじめてそれが可能となるのです。

さあ、今年の聖週間をどのように過ごしましょうか？ 二つのことに心を留めていただけたら幸いです。一つは COVID-19 に感染し、苦しんでおられる方々のために、お祈りください。政府とマスコミは、わたしたちが直面する現実から目を背けさせようとしているように思えます。感染者とその家族が顧みられないのはとても残念なことです。

二つ目は、ミャンマーの人々のために祈ってください。どの勢力が正しいのかは簡単に判断はできませんが、少なくとも子どもを含む多くの犠牲者が生まれました。この人たちのことを忘れてはならないでしょう。

### 復活の主日のミサは

午前 7 時

8 時半

9 時半

の三回です。

どうぞ、いらしてください。ご一緒にお祝いしましょう。

